

第二次世界大戦下のナウル島で起きた「欧州人殺害事件」の背景

岡村 徹

(公立小松大学国際文化交流学部)

1. 序論

本論文は第二次世界大戦下、南太平洋の孤島ナウル島で起きた「欧州人殺害事件」の背景について考察するものである。事件は1943年3月26日、米軍によるナウル島への空爆があった後に発生している。犠牲者は全員オーストラリア人であったこともあり、1945年9月20日の『シドニー・モーニング・ヘラルド』紙にもその記事が掲載された。

JAPS MURDER FIVE ON NAURU

Atrocity In 1943 Disclosed

CANBERRA, Wednesday.—The Australian Administrator of Nauru Island and four other officials were executed by the Japanese at Nauru Island on March 26, 1943. Those executed were:—The Administrator, Lieutenant-Colonel F. R. Chalmers, of Tasmania. The Government medical officer, Dr. B. H. Quinn, of Melbourne. The medical assistant of the Nauru Administration, Mr. W. H. Shugg. The engineer of the British Phosphate Commissioner's staff, Mr. W. H. Doyle. (20 September 1945, *Sydney Morning Herald*, Microfilms Dixon Library, University of New England, Australia)

この事件は戦犯裁判でもオーストラリア側によって強い関心を持たれた。そして、ナウル島で起きた他の戦争犯罪行為、すなわち、「ハンセン病者集団虐殺事件」、「ナウル島民移送事件」、「原住民殴打事件」等とセットで事実の解明に向けた裁判が行われた。なお、この事件に深く関わった当時の副長は、1946年5月にラバウルで裁判にかけられ死刑の判決を受け、同年8月10日に処刑された。そして副長から拳銃で欧州人を撃つよう命令された当時の少尉は1947年8月に禁固20年の判決を受けた。

次の章では、この事件を取り扱った先行研究を挙げ、何が未解明な部分かを浮き彫りにし、それについて三つの角度から考察を試み、実態に迫りたい。

2. 先行研究

この事件については、さまざまところで言及されているものの、いずれもその全体像までは解明されていない。例えば、Shaw (1967) は、「日本軍による襲撃ののち、5人のヨーロッパ人が処刑された。日本人はのちに彼らは米軍による空爆で死んだと

嘘をついた」(p. 14)とし、Macdonald (1985) は、「Chalmers は 1943 年 3 月 26 日、日本軍に処刑された」(pp. 246-247) と記している。さらに Garrett (1996) は、「日本人はナウル島に来島すると、すぐさま 5 人のヨーロッパ人管理責任者と BPC (英国燐鉱石公社) の職員全員を逮捕した」(p. 27) (中略) その後、この 5 人は殺害されている」(p. 165) と述べている。

林 (2009) はメルボルン公文書館等で資料収集を行い、この事件について次のように記している。以下は、林 (2009: 44-46) を基に筆者が要約したものである。まず事件の背景としては、トラック島の海軍司令部からナウル島の本部に、ナウル南方に連合軍の艦隊が集結しているという情報が入った。これが基で、連合軍のナウル島への上陸が近いと本部によって判断された。もしこれが現実になれば、欧州人らが逃走し、島民を煽り、日本軍の活動を妨害するのではないかと考え、欧州人を処刑したと考える。当時の副長であった中山大尉は豪州軍の尋問に対して、安全な防空壕に欧州人を移動させているときに米軍の空爆があり、皆やられたと証言した。しかし豪州軍は、島に居た中国人通訳やギルバート人の警察官や日誌を提供したドイツ人とのハーフの人物らからさらなる証言を収集し、ついに中山大尉は言い逃れができなくなった。その後、中山大尉は 1946 年 5 月 4 日付の尋問調書で初めて、欧州人の処刑を認める供述をおこなっている。第 67 警備隊の副長だった中山大尉は本部の兵 5 名を率いて、トラックで欧州人が収容されている家に行き、あらかじめ部下らに命じ海岸に穴を掘らせていたが、目隠しをされてそこまで連れていかれた欧州人 5 名はそこで一人ずつ銃殺された。

岡村 (2019) は、この事件に当時の国策会社の一つであった、南洋拓殖株式会社 (以下、南拓とする) 社員らがどこまで関わっていたのかについて調べた。南拓は食糧の増産に励むばかりでなく、日本海軍の施政に協力するという任務が課せられていた。ナウル島民をトラック諸島に移送する業務も請け負った。さらにはハンセン病者を別の島に移送するためにナウル島の埠頭で患者らを見送っている。しかし、南拓はこの本稿で扱うこの事件に直接的には関与していない可能性が高いと報告した。

本論文では林が述べた事件の背景について、他の二つの事件が起きた背景と照らし合わせながら当該事件の起きた背景を考察する。次の章では、この事件に関する公文書の資料を分析し、事件が起きた理由を考えたい。

3. 公文書の分析

まず最初に、調査の対象となる資料は国立公文書館に保管されている『ナウル島等に関する件回答』[本館-4B-023-00 平 11 法務 06295100] である。なお、本稿において用いられているこの事件の名称については、上記の資料に含まれる名称をそのまま採用している。

まず、チャルマーズのボーイをしていたという中国人証人リー・チョン・ウォンの陳述を見てみよう。日本軍が 1942 年 8 月にナウル島を占領した際、欧州人 5 人が島に居た。彼らは直ちに日本軍に捕らえられ監禁された。そして、1943 年 3 月 25 日、米軍機による爆撃がナウル島にあった後、この 5 人は殺害されたという事件である。下記の引用について、原文ではカタカナで表記されているので、それをひらがなに改めた。誤植等も散見されるが、そのまま引用している。

1943 年 3 月 25 日、米軍の爆撃がありました。このとき以後証人はチャルマーズ大佐もその他の西洋人俘虜をも見た事はありません。彼の言った所によれば、西洋人達が住んで居た部屋の床に血痕がついて居たのを見ました。(〔本館-4B-023-00 平 11 法務 06295100])

また、民間人タウアの供述も検証のために提出されている。彼は昭和 16 年に、英国人によってナウル島に移され、燐鉱採掘の仕事をしていた。昭和 18 年には日本人によって、ナウル人と一緒にトラック諸島のトル島（水曜島）に運ばれている。そこで飛行場の建設に従事している。タウアは「この事件について知っているか」、と尋ねられ、「はい」と答え、その後、「知っていることすべて述べよ」と言われ、連合軍の爆撃があった晩のこととして、次のように証言している。

夜明方一台の貨物自動車は病院の傍へやって来ました。そして私は四人の日本兵が病院の近くの一軒の家へ入るのを見かけました。私は日本人が止まったこの家に面している病院の入り口に立っていたのです。一人の日本兵はこの家の扉を開けて彼らに戸口のところまで出てきて家の中で彼の前に整列するようにと叫びました。銃を持った三人の兵士は家の戸口の外に立って居り、剣を持った一人は彼らの前に立って居りました。剣を吊った日本人は彼らの一人にもっと傍によるようにと叫びました。エフ、アール、チャーマル大佐が前へ寄りました。そこで私は大佐が前屈みになっているのを見かけました。日本人は片手に剣を振り上げて大佐の頸に打下しました。大佐の首は胴より離れました。それからクイン博士、ドイル氏、ハーマー氏、シヤッグ氏が一度に一人ずつ前へ進みました。剣を持った日本人は同じ動作を行って遂に上記の人々はすべて首を斬られてしまいました。(〔本館-4B-023-00 平 11 法務 06295100])

彼は斬首が行なわれた欧州人の順番や実施場所まで覚えており、詳細な証言として当該事件の証拠とされた。ただ、殺害の方法については他者の証言と食い違いもある。これについては後述する。

また欧州人のボーイとして、一日三回の食事を提供していた中国人の証言も証拠として取り上げられている。中国人のボーイが欧州人らを最後に見た日時が、前の民間人の証言と一致したこと、さらに欧州人が住んでいた部屋から大量の血痕が見つかったこと、日本人衛生兵が欧州人の住んでいた家の前で、二時間おきに交代で見張りを

していたことなどの詳細を語っており、重要な証拠として戦犯裁判の際に取り上げられている。

私は五人の白人の炊事をいたしました。一日三度彼人々(ママ)に食べ物を運びました。私は 1943 年 3 月 25 日八時頃の米軍からの空襲を覚えています。爆弾はチャルマーズ大佐が拘禁せられていた家から遠く離れた所に墜ちて、その家は害を受けていませんでした。翌朝七時、私がチャルマーズ大佐の家に行きますと、その戸口には各日本の衛兵が立っておりまして、私になぜに来たかと、尋ねましたから、「私はこの家のボーイでありますから」と答えましたところ、内に入ってもよろしいとのことでありました。内に入ってみますと、白人は皆いなくなっていることを見出しました。(中略) 私は白人たちはどこにいるのですかと衛兵たちにききましたが、何にも私に語る事をいたしません。八時になって白人たちの食糧を出しに下りて行きますと彼らは「もう無い(ママ)」と言いました。西洋人たちは前夜までは皆この家におりました。そのうち、ドクタークインが歩けない以外、皆健康でありました。(中略) 私がその朝七時に行きましたときに、ドクタークインが、平常寝ていた場所から床の上に長く血をなすったような痕が部屋の中からずっと続いて下の戸口のところにまで及んであたかも人の体でも引きずっていったかのように見えました。(中略) 私がチャルマーズ大佐を最後に見たのは 43 年 3 月 25 日夜、私が彼の夕食を持って行った時でありました。([本館-4B-023-00 平 11 法務 06295100])

この事件については軍属の佐藤仁も取り調べを受けている。佐藤によると、殺害された欧州人の人数は 5 人ではなく 6 人と証言されている。一人多いのは後にトラック諸島に移送されるナウル人らに混じっていたスイス人宣教師が頭に含まれていたためと思われる。いずれにしても佐藤が直接見た事件ではなく、人から聞いたという形で証言が進行している。佐藤は、隠していてもいずれ明るみになることだから、という理由で証言を行った。

二つ目にこの事件の命令を下したのが、当時の副長であり、殺害の実行者は当時の少尉であると明言している点が豪州側に、その副長や少尉にさらなる目を向けさせることになった。佐藤の証言にもあるように、米軍による空爆があったのち、その被害の状況を少尉に報告する義務があったことが見て取れる。したがってこの事件は米軍の空爆によって被害を受けたことに対する報復措置の一環としての行為であった可能性もある。先に取り上げた中国人や民間人の証言にもあるように、時系列で言うと、この事件は空爆後に起きている。したがって、それに対する報復の可能性も十分にあるのである。実際、ナウル人とギルバート人の証言から、米軍の空爆で滑走路が損傷したため、日本軍が腹を立て彼らが殺害されたという可能性も十分にある。

Other evidence given by Nauruans and Gilbertese suggests that the prisoners were summarily beheaded in anger because of the damage caused by the raid, and their bodies thrown into the sea. (Macdonald and

Williams 1985: 326)

佐藤は欧州人が住んでいた場所も把握しており、彼らが殺害された後、「どこに埋葬されたのかわかるか」との質問に対して積極的に証言をし、実際この後、埋葬された可能性のある場所まで関係者を案内している。先に挙げた中国人が少尉のことをよく知っているはず、との証言も豪州側にさらなる確認の材料を与えたと思われる。佐藤は欧州人を運んだとされる運転手には責任はなく、実質的な責任は副長と少尉にあると断言している。遺体が埋められた場所について尋ねられ、中国人が知っているかもしれない、と答えているが、これは結果的に豪州側にその中国人に目を向けさせることに寄与したと言える。

事件が起きた時期についても、二回の空爆があったが、最初の空爆が起きた直後のはずだと答えており、これは中国人の回答と一致する。豪州側がこの事件が起きた時の上層部を特定しようと試みる質問をしているが、佐藤ははっきりと副長の名前を告げている。竹内大尉はこの事件の起きた後に、ナウル島に来島していること（これは事実と異なる）、そして南拓社員の石川好雄も同様の証言をしており、副長は言い逃れができなくなっていく。石川は竹内大尉について、病弱であったが、島民の福祉に強い関心を持っていたこと、そしてナウル島に来島した日時が事件発生後であったことを証言している。少尉から聞いた欧州人殺害についての直接談も、すでに日本に帰国したとされていた少尉の取り調べに目を向けさせることになった。

豪州側は欧州人を移送した可能性があるとして、運転手についても佐藤に尋ねているが、これについて佐藤は「可能性はある」としか答えていない。後の運転手への取り調べでは、「欧州人は空爆で死んだ」と証言していることから、この事件は一部の人以上しか把握されておらず、上層部が秘密裡に事を進めたかったという思惑が見て取れる。

On my arrival I observed there were six Europeans on the island. During the time of the second bombing 1st Lt NAKAYAMA Company Commander of the Guard Unit HQ ordered 2nd Lt SASAKI to execute six men. I was working at the airfield at the time of the air-strike and was ordered to assess the damage done and submit a report thereof to HQ. I reported the damage to 2nd Lt SASAKI who later told me that he (SASAKI) had been ordered by 1st Lt NAKAYAMA to execute six Europeans. (中略) A Lee Wong Chong, a Chinaman, was cook for high Australian authority. This cook knows of 2nd Lt SASAKI very well. 2nd Lt SASAKI had done great bodily harm to Chinese as well as other people, so the cook should identify him easily. 1st Lt NAKAYAMA and 2nd Lt SASAKI were the two who were responsible for many bad things on the island. (AWM54-615/5/1 31/51)

次は実際の尋問の場面の一部である。少尉がこの事件に深く関係している、と佐藤が思った根拠について述べられている。

Q: How long after the execution did you hear of it?

A: The time of the bombing was from late evening to early morning. After the raid I went to examine the damage caused on the airstrip; at about 1200 hrs I reported to 2nd Lt SASAKI giving him details of the damage. 2nd Lt SASAKI pointed to his pistol and proudly said that his pistol had killed the Europeans. SASAKI was showing off his skill as a pistol shot.

Q: Did SASAKI state why the execution of the Europeans had been carried out?

A: He did not say.

Q: Did SASAKI state who else was at the execution?

A: No.

(AWM54-615/5/1 31/51)

その少尉は、1946年10月10日に巢鴨プリズンで、この事件に関しては無関係である旨の証言をしている。下記の報告はウィリアム判事がまとめたものの一部である。

EXECUTION OF 5 EUROPEANS SASAKI positively denies: That he (SASAKI) shot any of the Europeans with his pistol, as related by SATO GIN. (AWM54-1010/6/90, MP742/1-336/1/908)

また、南拓社員の石川好雄も聞かれているが、先の証言ほど多くのことを把握していない。石川は欧州人が打ち首にあったという噂を耳にしている。またこの事件に深く関わった人物についても聞かれているが、その件について石川は知らないと答えている。さらに殺害された5人の欧州人のうち二人とは親しい間柄で、時々食糧や贈り物を交換する間柄であったとも証言している。その二人のうち、どちらの身長が高かったかについても記憶していた。石川が住んでいたところは、欧州人の見張りをしていた兵隊らの居住区の近くであった。副長の命令を受けて殺害を実行した少尉らが欧州人を殺害した後、その少尉らが欧州人のトランクやスーツケースや靴等を兵舎の裏手に運び、そこでそれらを燃やすのを実際に目撃している。

その殺害後 60 日ほど経過して、海岸でたまたま日本兵がブルドーザーで防御施設（要塞）を造っているとき、偶然、二人の遺体が掘り起こされた。そして原住民の労働者を集め、石川は再びその遺体を埋めなおすよう指示されている。遺体はかなり腐敗していたが、石川は衣服からその遺体が殺害された二人に違いないと確信した。遺体はもともとあった墓地から 30 メートルほど離れた場所に埋葬された。この調書の資料にそのように書かれているのだが、殺害された欧州人がなぜ二か所に埋葬されたのかを豪州側が明らかにするために聴取されたようである（『ナウル労働者移動に関する件』[本館-4B-023-00 平 11 法務 05831100]）。

豪州側は石川を信頼していたと思われる。石川が戦争犯罪に関する資料を積極的に提供しようとしていたこと、この日のために証拠となる資料のコピーを保持していた

こと、それから特に豪州側からインタビューを受けた社員らの中で日付に関する記憶は他者より秀でていたことを豪州軍ウィリアム少佐がまとめている点からもそのように判断できる。石川は直接この事件については関与しておらず、うわさを聞いたという形で報告書がまとめられている。以下は、石川証言を、ウィリアム判事がまとめたものを筆者が短く要約した。

石川の記憶では、欧州人犠牲者が打ち首にあったとは聞いたが、銃剣で突かれた、もしくは銃殺されたといううわさについては聞いていない。また松浦の証言もうわさを聞いたという形で報告書の中で取り上げられているが、殺害の方法について、松浦ははっきり記憶していないものの、何人かは打ち首にあい、また何人かは銃剣で突かれ、そして何人かは銃殺されたと証言した。AHQは副長についてこう助言した。欧州人は銃殺されたと。石川は佐々木が欧州人を銃殺したといううわさは聞いていない。石川はハンマーがドイルよりも体が大きかったことを記憶している。石川は彼らと親交があり、ときどき食料やギフトを交換した。佐々木は、ドイルのほうが体が大きかったと記憶している。石川は欧州人処刑の翌日、守備隊が殺害された欧州人のものと思われるトランクやスーツケースや靴等をバラックの近くまで運び焼却しているのを見ている。そして石川はその処刑から60日ほど経過して、海岸の所で、日本人の所有するブルドーザーが要塞を造っているのを目撃した。そして石川は偶然二人の遺体を見つける。石川はその遺体を再び埋葬するために原住民の団を結成することを要求された。遺体は腐敗がかなり進んでいたため石川は識別できなかったが、その衣類から処刑された欧州人の遺体であると確信した。(MP742/1-336/1/1292, File 3)

それからこれは十分な検討が必要だが、南拓社員らが積極的に証言をしたのは、関係者が次々と禁固刑および死刑が宣告されていく中で、次は自分たちの番であると、豪州側からどう曲解されるかわからない不安はあったかもしれない。つまり保身のために積極的に資料を提供したという可能性も残る。これについては別稿に譲りたい。

南拓社員は他にも三上大作が証言をしている。「十八年三月再びナウル島に参りましたが四月か五月頃ナウル飛行場が爆撃せられた夜に豪州人五名が殺害せられたと云うことを聞きました」と答えている。島民、中国人、豪州人等の殺害に関しても尋問されているが、すべて人から聞きましたという形で供述をしている。1946年9月18日のことである(MP742/1-336/1/1292, file 1)。三上が尋問を受けたのは、南拓の社員として責任ある立場にあったためである。三上はナウル鉱業所の調査隊長として、また次長としての肩書があった(国立公文書館つくば分館「南拓社員原簿ほか」つくば書庫9、37 13 253)。

さらに事件の概要を記した文書をもてみたい。そこには副長の指示の下、少尉を含む4人の日本兵が殺害を実行したこと、原住民がこの少尉と運転手を含む4人の日本兵を目撃していたこと、が報告されている。この目撃証言には剣を持った日本兵が欧

州人のいる家に入っていったのを証言者が見ていること、そして首のない遺体を運んでいたことを目撃しているので、目撃者は剣が犯行の道具となったと判断したと思われる。佐藤の証言では、少尉が銃殺したとある。銃殺したあと、身元がわからないように首を斬った可能性もある。事実、犠牲者の一人 Dr. Quinn は打ち首によって殺害されたと注に記されている。

After daybreak on the morning of 26 Mar 43, following an Allied air raid on the island, Chinese and Nauruans who were patients or attached to the hospital staff witnessed, unobserved by the Japanese, a motor truck stop put side the house where the Europeans were detained. About 4 Jap soldiers, including one officer with a sword entered the house. From their various points of vision the witnesses were able to see into the house to varying degrees and witnessed various stages in the beheading of the five Europeans by the Jap officer with his sword. The headless bodies and a box containing the heads of the 5 Europeans were afterwards seen to be carried out of the house and loaded on a truck by a party of Japanese, of whom several were identified, including 2nd Lt SAKATA, Tadae and Seaman HARADA, Takekazu. (JAPANESE WAR CRIMES ON NAURU Ref AHQ signal 2328/AG18204 of 18 Apr - para 7.)

当初、犯罪捜査局のウィリアム判事は、竹内大尉がこの事件に関与していると考えていた。

竹内大尉はこの事件についてはほとんど知らないが、欧州人が監禁されていることを副長から聞いていた。彼は英語を理解できず遠くからしか欧州人職員を見ていないが、彼は3~4人の職員に加えてスイス人宣教師がいたことを回想している。そして欧州人は監禁されていたとはいえ、ガーデニングをしたり、身の回りの世話をする中国人との自由な時間をかなり楽しんでいただろうだったと述べている(AWM54-1010/6/90, MP742/1-336/1/1535)。

また欧州人が住んでいた場所について、中国人居住区の近くにある病院からそう遠く離れていないところがあったとも述べている。空爆は1943年3月下旬の深夜から翌日の夜明けまで続いた。空爆が続いた後、竹内は指令室に赴き指揮をとった。そこに副長が来て欧州人のことについての報告を副長から聞いたが、よく理解できなかったものの、混乱が続く中、副長の報告から竹内は欧州人が空爆で死んだという印象を持った。その後竹内は被害の状況を確認するために島内を視察している。

竹内は連合軍のナウル島への上陸が近いことを心配したが、すべての死傷者の処理等については副長に任せてナウル島を離島した。日本人の遺体については火葬し、欧州人の遺体については埋葬されたと信じた。タラワの本部に戻った竹内は、欧州人の死傷者は他の死傷者数全体の中に含まれていると判断した。竹内はあまり詳細について思い出せないようだが、この通知は副長によってまとめられ、竹内に提出されている。

竹内は欧州人が殺害された状況についてわからないと答えている。もっと詳細に報告がなされていれば竹内ももっと多くのことを思い出せたであろう。竹内の記憶がいまいなのは、さらなる詳しい報告を受けていないためでもあるとされている。竹内がこの事件を詳しく知ることなしに、通り抜けていった可能性があるかとまとめられている。竹内はいつも副長らと食事を一緒にとっていたにもかかわらず、空爆から3週間後くらいまで欧州人が死亡したことについて副長から報告を受けていなかった。副長はとある晩の食事の会話の中で欧州人が空爆で亡くなったと竹内に匂わせている。欧州人が住んでいたところから島内の別の場所のシェルターに移動させるときに空爆で亡くなったと竹内は聞いた。竹内は副長が欧州人を安全な場所に保護するためにトラックで移送させたと考えていたようである。竹内はすべてを副長に任せていたので、それ以上のことは知らないと答えている。

He recalls there being 3 or 4 officials or civilians and one Swiss missionary, whereas there were 5 officials or civilians and 2 missionaries. Takeuchi claims that the Europeans enjoyed considerable liberty of movement, included in gardening and had a Chinese servant assigned to them. (中略) The raid commenced during darkness at about 2300 hrs sometime in the latter part of Mar 43, and continued until about 0400 hrs the following morning, shortly before daylight. Immediately the raid commenced TAKEUCHI processed to the combat direction station and remained there directing operations until about 0900 hrs. During that time he received several reports from NAKAYAMA. At between 0200 and 0300 hrs (he is positive that the time was early in the morning during the hours of darkness) NAKAYAMA came to the combat control station and made a report concerning the Europeans. Owing to the bombardment TAKEUCHI claims that he did not clearly understand NAKAYAMA'S report, but he gained the impression that the Europeans had been killed by the bombing. (AWM54-1010/6/90, MP742/1-336/1/1535)

この「欧州人殺害事件」が先に取り上げた「ナウル島民移送事件」と何らかの関係があるかもしれない。「欧州人殺害事件」は、「ナウル島民移送事件」の前に起きている。連合軍がナウル島に上陸すれば、これまで起こした数々の日本軍による非道ぶりが明かされ、それに関係した日本兵は処罰される危険性があった。つまりトラック諸島への「ナウル島民移送事件」は、「欧州人殺害事件」等の発覚を恐れたために実行された可能性もあるということである。実際、戦局は益々悪化していった。食糧の供給もうまくなされなかった。1943年以降、連合軍の空爆が激しさを増し、防戦一方であったことはナウル戦友会の資料からも理解できる（ナウル通信会 1987）。連合軍の上陸も近いという判断があったようである。南拓の社員に知られることはきわめて都合の悪いことであったことは間違いない。

事実、「ハンセン病者集団虐殺事件」の裁判でも、多くの事件関係者が副長から当該

事件を秘密にするよう言われたと証言している。「欧州人殺害事件」が異なる論理でもって、堂々と実行されたとは考えにくい。副長が裁判で、欧州人らは米軍の空爆で死亡したと嘘をついているが、これは表沙汰にしては自分たちが困ると考えたからなのかもしれない。

次に、日本軍に殺害された5名の豪州人が、日本軍のナウル島への来島が近かったにもかかわらず、なぜナウル島に残ったのかを考える。

4. Chalmers らはなぜ島に残ったか

チャルマーズ (Chalmers, Frederick Royden) は、1881年タスマニアに生まれた。1943年にナウル島で亡くなるまで、農夫、兵士、行政官等の仕事をこなした(Kerry 1979)。地元タスマニアのパブリックスクールを卒業後、そこで父親と一緒に農場を開いたが、このときの経験と知識がナウル島で生かされることになる。ナウル島は元々、農業には適さない土地であったため、農業に関する知識やスキルを自分たちに提供してくれる、チャルマーズの存在がナウル島民にとっては必要であったと思われる。またチャルマーズも、島民の福祉向上をはかる目的があり、ナウル島を離れるわけにはいかなかったようである。

チャルマーズは、海外での経験も豊富で、18歳の時、騎馬警官として南アフリカに渡っている。1900年8月中尉に昇格、1907年ビクトリア鉄道で勤務、その後販売員として働いている。1910年1月4日 Mary Cecilia Bennett と結婚するが、彼女は1914年に亡くなっている。翌年4月、彼は Australian Imperial Force に入隊する。そして中尉に任命され、第27大隊の一員として従軍。従軍先はエジプト、ガリポリ、フランス、ベルギーである。1915年8月には大尉に昇格し、1919年には C.M.G. (聖ミカエル・聖ジョージ三等勲爵士) となった。

1917年5月ロンドンでフランス人 Lenna Annette と二度目の結婚をする。その後数年間、タスマニアで農業や鉱山労働者として働いている。地元の帰還兵の支部で会長を務めるものの、1938年10月チャルマーズはオーストラリアの委任統治領としてのナウルの行政官に任命される。高貴な性格でナウル島民にも信頼されていたようである。1940年12月、ドイツによる空襲で燐鉱施設も爆撃されるが、彼はそれに怯むことはなかった。この時敵を欺く行動に出るが、そのような逸話が後世に語り継がれるほど島民の間では存在感があったのであろう。1940年12月、ドイツ軍による燐鉱地への空爆があった時の話である。原住民がシェルターに逃げ込む中、チャルマーズは敵をあざ笑うかのように白い杖を使って、ゆっくりと島内にある礁湖の縁をあちらこちらと歩き回った。島は何も抵抗できない状態にあったためである。これは上空に居る敵から見れば、白アヒルのように見えたことであろう。

1942年2月、外国人を中心に疎開をする機会があったが、彼はナウル島にとどま

ることを決めた。これまで彼が築き上げてきた島民との信頼関係が、離島を難しくしたとも言える。そのことが窺える例がある。島では蚊の対策、豚の飼育にも尽力していたという事実がある。

1942年8月26日、日本軍がナウル島に上陸した。彼と他の4人の欧州人はただちに日本軍によって監禁されてしまう。この監禁は1943年3月25日まで続いた。その日、米軍による空爆があった後、車で海岸まで運ばれ、処刑される。チャルマーズが62歳のときであった。遺体が埋められた場所についてははっきりしないものの、海岸に埋葬された可能性が高いとされている。1951年ナウル島にチャルマーズと他に戦争で犠牲になった人たちのための記念碑が建立された。記念碑は今日でもナウル島のガバメントハウスの前にある。記念碑に彼の名前が刻まれていることから、彼の存在の大きさが理解できる。

疎開するように言われても、島民の世話をする義務があると判断し、他の4人の豪州人とともに島に残る。彼がナウル島に向かう前に、彼が三日間一緒に過ごしたとされる、*Pacific Islands Monthly* の編集者ロブソンによると、チャルマーズは日本軍の脅威が差し迫っているので、妻と娘を疎開させ、自分はここに留まり、島民のめんどろをみると彼に話したという。またすべての外国人が疎開できたわけではなかったため、その人たちの面倒も見る必要があったようである。彼は高潔な退役軍人であった。彼は行政官として誠実に仕事をこなし、顕著な業績をあげた。農業の経験があったので、その知識を生かしてナウル島でも応用し、島民の福祉向上のために尽力したようである。以前 Rosebery で福祉職員を務めていた経験があり、そのことがナウル島に残る決意を増幅させたであろう (Jillettfamilyancestors.blogspot.com)。

このようなナウル島社会への姿勢は、彼らの単独の発想と行動によるものではない。当時豪州を中心とした委任統治国はナウル島の社会の向上のために最大限の努力をしていた。物資の面とモラルの両面で尽力した。このような歴史的・社会的背景があった中での彼らの島に残るといった判断と行動であったと思われる。したがって、彼ら5人は1942年早々に外国人のための疎開の体制が整ったとき、彼らは自ら志願してナウル島に残ったのである。日本軍に捕らえられると、処刑される危険性があることを彼らに伝えるべきであったと深く後悔した人物もいたことが知られている。勇敢にも任務のために犠牲になったこの5人の豪州人の親戚に、彼は深く同情の念を示したという (Jillettfamilyancestors.blogspot.com)。

ところで他に犠牲になった欧州人だが、メルボルン出身のクインは1940年3月以降、政府によってナウル島に派遣され軍医官を務めた。彼は1894年に生まれた。1920年から1921年まで、BPC（英国燐鉱石公社）によってナウル・オーシャン方面の軍医官の補助要員として雇われた。そして1935年5月、ナウル島で、政府によって派遣された二人目の軍医官になった。彼は豪州軍陸軍の隊長として緊急時には任務を遂行する存在として位置付けられた。

シャッグは、長年ナウル島で医療アシスタントとして、また薬剤師として貢献した。ハーマーは BPC の技師として、そしてドイルも同じ BPC の監督者として勤務した。被害者は全員豪州出身者であったと言われているが、このことも 5 人全員がナウル島に残った理由になると考えられる。加えて当時の日本軍は、東南アジア方面への進出に力を入れていたこともあり、ナウル島への進駐までその時期が予測しづらい状況にあった。

チャルマーズの性格は、様々な文献で触れられている。例えば、easygoing という評価がある (Macdonald 1985: 289)。彼をナウル島に着任させることを心配した人物もいた。これまで海外経験が多いとはいえ、原住民をうまくコントロールできるのかといった声もあった (Macdonald 1985: 289)。しかしこれは逆に、そういった声を払拭したい、という本人の意志を固定化することに繋がり、離島するのを難しくしたのではないだろうか。

チャルマーズは 1939 年に一度、日本軍来島の時期について、キャンベラの本部に助言を求めている (Macdonald 1985: 294)。このときは本部から、ナウル島から疎開すべき軍事的な理由はない、との連絡を受けている。そして、自身がボーイスカウトと深いかかわりがあったことから、ナウル島でも見晴らし台にボーイスカウトを配置すべきとの提案をしたり (Macdonald 1985: 295)、島内での警察組織の強化についても提案をしていることから、チャルマーズは決して ‘のんきな’ 性格だけではなかったようだ。

最後に、「欧州人殺害事件」よりも後に起きた二つの事件を取り上げ、さらに当該事件が起きた背景について考察する。

5. 二つの事件との関連性

「ハンセン病者集団虐殺事件」は 1943 年 7 月に起きた。当時島内の療養所には 39 名の患者がいた。第 67 警備隊の副長およびその一部の部下は日本兵への感染を恐れ、患者らに別の島で一生の療養を保証すると嘘をつき、患者を神州丸でえい航し、ナウル島が見えなくなったところで砲弾を数発撃ちこみ、生き残った者は銃殺した。犠牲者は 20 代が 13 名と最も多く、以下、10 代が 9 名、40 代が 8 名、30 代が 5 名、50 代と 60 代がそれぞれ 2 名ずつある。最小年齢は 11 歳、最高年齢は 69 歳である。平均は 31 歳。まだ 20 歳にも満たない患者が 9 名もいた (岡村 2015: 97)。この事件は 21 世紀の人権を考えるうえで、近現代史や戦争犯罪の諸問題を超えて、現代を生きる地球市民に示唆する内容が多い。そして、占領軍に積極的に訴えた南拓社員の石川好雄の行動は戦勝国と敗戦国の区別を超えた、人類に共通するモラルを私たちの世代に伝えた。この事件は、多くの日本人が聞かされてこなかった事実とは言え、人々にハンセン病は恐ろしいといった意識を植え付け、それを固定化する働きをしたとも

言える。九十年に及ぶ国の隔離政策と国民一人一人の無知がいかにも愚かであったかということも言える。当時の海軍の立場がどうであれ、また国策会社社員の職階がどうであれ、この事件はたしかに起きた。この類の事件は氷山の一角にすぎないと考えられる。

一方、ナウル島民がトラック諸島に移送された事件は、1943年6月と同年8月に起きた。筆者は南拓社員の多くがナウル島を離島した時期にこれら二つの事件が起きていることから、これまで議論してきた事件と合わせて、この一連の事件を上層部が秘密裡に遂行したかった可能性があることを指摘した。公文書にもあるが、主な理由として、食糧問題を解決する必要があったとする考察も今後十分になされなければならない。事実、トラック諸島に移送されたナウル人は、1944年以降は食糧難のため各島へ分散移送されている。このトラック諸島でのナウル島民への措置が事実であれば、ナウル島での日本海軍の行動も同様に考えることができる。悪化する食糧事情を緩和するためと解釈するためにさらなる論拠を積み上げないといけないと考えている。

南拓の役割として浮かび上がってくるのは、第67警備隊の施政に協力する姿である。南拓は、ハンセン病者集団虐殺事件がこの二回の移送事件の間に行われたことを知らされないまま、移送業務を遂行した。どの事件についても、南拓が主導した形跡はないことがわかっている。旧日本海軍の上層部が、事を秘密裡に進めたかという「思惑」があったかどうかを今後検討、解明しなければいけないが、事件の実行者や指示者らが戦後すぐに処刑されたり、戦犯裁判のやり方が不十分であったため、困難を極める。南拓社員の離島が患者殺害計画を実行しやすくしたということも、今後の課題として検討されなければならない。

南拓が請け負った業務の中に、燐鉱の開発および飛行場の建設を主な目的として、朝鮮人労務者をそれぞれの島に送還しているが、送還月日や船名など詳細に記録しており、そこに強制性の意図は見られない。南拓が朝鮮人労務者と個別に向き合っていたことが伺える事例も存在する。南拓の負の事例も存在するが、それは第67警備隊の上官クラスの強い指示が働いた結果と思われる。この点については、さらなる論拠を積み重ねないといけないと筆者は考えている（岡村2019）。

上記二つの事件はいずれもある点で共通している。それは第67警備隊にとって、患者と島民の存在が都合が悪かった、という点である。前者は日本兵への感染を回避したいという理由で、後者は食糧問題をこれ以上悪化させたくないという理由で、それぞれ虐殺、他島への移送を判断・実行した。その点、「欧州人殺害事件」は三つの解釈が可能である。

まず、欧州人の存在が都合が悪かったという点では、先の二つの事件と共通する。第67警備隊の施政に欧州人の存在が悪い影響を及ぼすと判断された可能性である。戦局が不利になり、連合軍の上陸が近いとの情報が入る中、口封じのため早めに欧州

人を殺害した可能性である。もし、捕虜たちが逃走し、これまでの日本兵の行いをすべて暴露されたら次は自分たちが不利になると考えた可能性がある。

二つ目の可能性は、第 67 警備隊の施政を徹底させるための、見せしめのための殺害の可能性であるが、これについて筆者は可能性が低いと考えている。なぜならば見せしめのための殺害は日本軍が上陸した当初の 1942 年 8 月と 9 月に行われているからである。「欧州人殺害事件」が起きたのは 1943 年 3 月なので、時間的に開きがある。もし見せしめのための殺害であれば、上陸当初に行われていたはずである。

三つめの可能性は、米軍に爆弾を投下され、滑走路等に被害がでたことに対する報復という意味合いである。筆者は報復の可能性が高いと考えている。少なくとも、見せしめのためという仮説よりも信憑性がある。この事件は時系列で言うと、日本軍上陸当初の見せしめのための殺害が 1942 年 8 月、「欧州人殺害事件」が 1943 年 3 月、ナウル島民のトラック諸島への移送が 1943 年 6 月と 8 月、「ハンセン病者集団虐殺事件」が 1943 年 7 月に起きている。つまり「欧州人殺害事件」は上陸当初の殺害事件と「ナウル島民移送事件」および「ハンセン病者集団虐殺事件」の間に起きている。この事件は両側の相異なる二つの時期に挟まれるような形で独立して起きているのである。最後の二つの事件、すなわち「ハンセン病者集団虐殺事件」と「ナウル島民移送事件」については林（2009）によると一連のセットになっていたのではないかという考察があるが、「欧州人殺害事件」については、別の背景があると考えたほうが自然である。

6. 結論

これまで検討してきた「欧州人殺害事件」の起きた背景をめぐって、米軍に爆弾を投下され、滑走路等に被害がでたことに対する報復という意味合いが強い可能性を指摘した。そのための論拠として、もしナウル島の施政を徹底させるために行う見せしめとしての処刑であれば、監禁当初に行われたはずだからである。ナウル島で起きた事件を時系列に観察することによって、ある程度事件の起きた背景に迫ることができるとわかった。つまり「欧州人殺害事件」は、上陸当初の「原住民殺害事件」と「ナウル島民移送事件」および「ハンセン病者集団虐殺事件」の間に起きている。当該の事件は他の二つの事件とは独立して起きており、背景も異なる可能性を指摘した。

【謝辞】

本稿にかかる調査は、国立公文書館本館およびつくば分館、国立国会図書館憲政資料室の資料を分析することにより実施した。また、本稿執筆にあたっては、拙著研究ノート（岡村 2019）を下書きに考察を加えた。

【参考文献】

Garrett, Jemima.

1996 *Island Exiles*. Sydney: ABC Books.

林博史

2009 「ナウルでのハンセン病患者の集団虐殺事件（上）」『季刊 戦争責任研究』64, 41-49.

2009 「ナウルでのハンセン病患者の集団虐殺事件（下）」『季刊 戦争責任研究』65, 66-76.

Kerry F. Keneally.

1979 Chalmers, Frederick Royden (1881-1943), *Australian Dictionary of Biography*, Volume 7, Melbourne University Press.

ナウル通信会

1987 『ナウル島——ナウル守備隊の記録』山口県豊浦町

岡村徹

2015 「戦時下のナウル島で起きたハンセン病患者集団虐殺事件と旧南拓社員の証言」『南方文化』41, 93-116.

2019 「戦時下における「ナウル島民移送事件」と「欧州人殺害事件」の南拓の位置と役割」『南方文化』45, 79-95.

Shaw, Patrick.

1967 *Republic of Nauru*. An Eric White Associates Production.

Williams, Maslyn and Barrie Macdonald.

1985 *The Phosphateers*. Melbourne: MUP.

【資料】

国立公文書館本館資料『ナウル島等に関する件回答』本館-4B-023-00 平 11 法務 06295100

国立公文書館本館資料『ナウル労働者移動に関する件』本館-4B-023-00 平 11 法務 05831100

国立公文書館つくば分館『南拓社員原簿ほか』つくば書庫 排架番号 9、37 13 253

オーストラリア国立公文書館メルボルン分館所蔵 MP742/1-336/1/1535, MP742/1-336/1/908, MP742/1-336/1/1292, file 1, MP742/1-336/1/1292, File 3, MP742/1-336/1/1535

オーストラリア戦争記念館所蔵 AWM 54-615/5/1 31/51, AWM54-1010/6/90, AWM54-41/4/64, AWM54-1010/9/118

オーストラリア陸軍第二戦争犯罪局（東京）覚書 36857 号、1946年4月3日 (signal 2328/AG18204 of 18 Apr - para 7. PRECIS OF EVIDENCE : Relative to Japanese war

crimes on NAURU Island: Execution of 5 Europeans at Nauru on 26 Mar 43)
W5b War Heroes of Susannah Jillett and William Garth, Jillettfamilyancestors.blogspot.com.
Access on 8 April, 2019.